

たたら製鉄の奉納額

良質の砂鉄を多く含む花崗岩で形成される中国山地では、古代から砂鉄や鉄鉱石を溶かして鉄を作り出す「たたら製鉄」が盛んに行われていました。

江戸時代になると、製鉄炉や炉に空気を送るふいごなどが改良され、藩や豪商らが製鉄や鍛冶を行う鉄山経営者となって大規模な組織の下で製鉄が行われるようになりました。

けれども当時は、現代のようにハイテク機器による緻密な計算の上で行われるものではなく、「村下」という技師長の経験に基づく判断の下で、砂鉄や炭を入れるタイミングや、炉内の温度管理が行われていました。したがって、時には気温や湿度などの変化や、村下の判断ミスなどで失敗することもありました。ですから、無事に製鉄が行われた時には、その成功を神仏の加護によるものと感謝していました。

写真1は、澤龍山少林寺（津山市中北上）にある奉納額です。鉄の原料である砂鉄と木炭を燃焼した際に炉から流れ出る「ズク」とよばれる銑鉄（せつてつ）を額に納めて奉納したものです。ズクが流出するということは、砂鉄



写真1 少林寺の奉納額

中の鉄分と不純物がうまく分離したことを証明するもので、すなわち製鉄の成功を意味するものです。おそらく、鉄山経営に関わる者達が、無事に製鉄が成功したことを感謝し、この額が奉納されたのでしょう。

現在文字は読み取れませんが、かつて赤外線フィルム撮影によって読み取れた文字には「四口野鉄山大釣鉄山」と書かれていたそうです。「四口野」とは、今の至孝農の古い表記ですので、奉納したのは至孝農と奥津の大釣付近で鉄山経営を行っ

ていた者達と思われます。年代は不明ですが、島根県安来市にある製鉄の神を祀る金屋子神社へ、寛政四年（一七九二）に四口野村から寄進されたことが奉加帳に記録されており、四口野村は、寛政十一年（一七九九）に、「至孝農村」と改称されますので、これらのことから、江戸時代後期の十八世紀末頃に奉納されたのではないかと考えられます。大釣鉄山については、詳細は不明ですが、連名で額を奉納していることから、同一の経営者か深い関係があったことが窺われます。

写真2は、富の布施神社に奉納された額で、「初花の額」と呼ばれています。こちらはその呼び名が示すように、炉から最初に流れ出て固まったズクをそのまま額に納めていることがわかります。炉から真っ赤

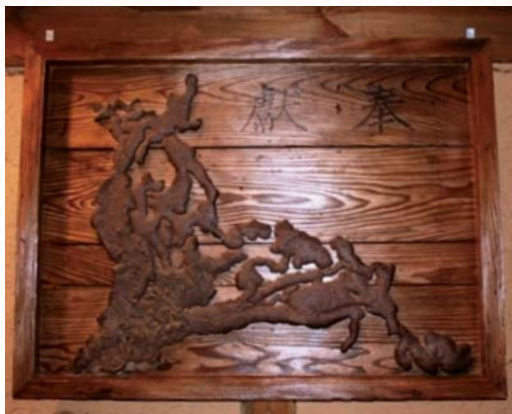


写真2 初花の額（たたら展示館）

に溶けたズクが流れ出て広がるさまは、咲き誇る花のような鮮やかさがあつたのでしょうか。わずかながら読み取れる文字から、明治十二年（一八七九）に、富仲間村の小倉朝三郎という人が奉納したもののようです。初花の額は町指定文化財に指定されています。

たたら製鉄が盛んであった、作州北部ならではの民俗資料からは、製鉄にかける職人達の厚い感謝の念が今でも伝わってくるようです。

参考資料：『作州のみち』2（下）、『奥津町史』通史編、
『鏡野町の文化財』
協 力：澤龍山少林寺

生涯学習課 日下

電話（0868）54-7733



写真3 布施神社（富西谷）